

IFRS 財団 評議員会 Tommaso Padoa-Schioppa 議長来日

FASF 事務局長付主管 にしの ゆうじ 西野 勇治



IFRS 財団評議員会議長

Tommaso Padoa-Schioppa 氏

はじめに

2010年7月に名称変更がされた国際財務報告基準財団（IFRS 財団）評議員会の新しい議長に就任された、Tommaso Padoa-Schioppa 氏が8月24日-25日の日程でIFRS 財団のCOO/ Tom Seidenstein 氏と共に来日された。

経歴

同議長は1940年イタリア生まれの70歳。イタリア中央銀行副総裁、バーゼル委員会委員長、

決済システムに関するG10委員会委員長等を歴任されたのち、2005年に初代ボルカー議長の後を継いでIASC財団（IFRS財団の旧称）議長に就任され、2006年にイタリア経済財務大臣就任のため、同財団議長を辞任しており今回は4年振りのIFRS財団評議員会議長復帰ということになる。

今回のご訪問

今回は、IFRS財団評議員会議長就任後の最初の海外訪問国としての来日であり、日本訪問後は引き続き韓国、中国を歴訪されIFRS財団としていかに日本、及びアジアを重視しているかの証左となった。

短い滞在期間の中で議長は、金融庁訪問（自見金融担当大臣、大塚金融担当副大臣、三國谷金融庁長官と面談）、経団連訪問（米倉会長と面談）、日銀訪問（白川総裁と面談）、東証訪問（斉藤社長と面談）、財務会計基準機構訪問（萩原理事長と面談）、IFRS対応会議メンバーとの朝食会と多忙な日程をこなされた。

一連の面談／会合で議長は、4年振りに戻った国際会計基準審議会（IASB）とIFRS財団がグローバルな基準設定機関として卓越していること、IASBとIFRS財団への日本の関係者の

貢献が際立って大きいこと、2010 から 2012 年が国際財務報告基準（IFRS）の Adoption の方向性が決まる重要な期間であることを繰り返し述べられ、2012 年に向けての日本の決断に強い期待感を示された。一方、日本の関係者からは、IFRS への意見発信力を高めるためにも IASB のサテライトオフィスを東京に招致したいとの強い希望が伝えられ、また、IASB と米国財務会計基準審議会（FASB）との協議の動向、IFRS とプルデンシャル規制との関係等で質問が出された。

おわりに

議長はかなり以前から何度も日本を訪問されている大変な知日派で、その哲学的な風貌と語り口から日本の歴史、文化への深い造詣の一端が示されると面談されている方々は大変驚くとともに深い感銘を受けた様子で、議長の人間的な魅力が十分に窺うことができた今回の訪日となった。